

日本人英語学習者の談話標識 *oh* の習得

——海外研修前後の発話を対照して——

山 本 綾*

The Acquisition of the Discourse Marker *oh* by Japanese Learners of English :

A Comparison of Learners' Discourse Before and After Study Abroad

YAMAMOTO Aya

abstract

This study investigates the influence of studying abroad on the acquisition of the English discourse marker *oh* by comparative before-and-after evaluation. Participants included 27 female Japanese university students enrolled into a six-week summer abroad program. Before and after the program, each student had a 20-minute dyad with a native speaker of English. A set of dyads between native speakers taken from the *London-Lund Corpus of Spoken English* was also analyzed as a benchmark. The results suggest that the students made substantial progress after studying abroad with respect to the frequency, position, and function of *oh* used in conversation. Before studying abroad, the students were considered to overuse *oh*; the majority of instances of use were free-standing (i.e., constructing a turn without any other element) and functioned almost exclusively as a backchannel or filler. The "after" data revealed that (i) the frequency of *oh* declined; (ii) turn-initial *oh*'s significantly outnumbered free-standing ones; and (iii) *oh* brought about a vividness to students' story telling by appearing in direct quotations, and also organized global structures of conversation by signaling topic shifts. The abovementioned results suggest that after studying abroad, the students achieved a more native-speaker-like usage of *oh*.

Keywords : second language acquisition, discourse marker, *oh*, study abroad, interaction

1. はじめに

英語の会話では間投詞 *oh* がしばしば談話標識 (discourse markers) として現れる。談話標識とは、一般的に (i). 統語的には文の随意的な構成要素で、(ii). 意味的には命題の真理条件に寄与せず、(iii). 機能的には会話の円滑な進行に必要な情報を聞き手に提供する言語形式を指す¹。日本語を母語とし英語を外国語として学ぶ学習者が談話標識を習得する過程についてはこれまでほとんど明らかにされていない。近年、日本人英語学習者の間で短期間英語圏に滞在し集中的に英語を学習すること (以下「海外研修」とする) が盛んに行われているが、海外研修中は母語話者と英語で会話する機会が飛躍的に増える。海外研修に参加することにより学習者の談話標識の習得が促されるのではないかと考えられる。本論文では海外研修に参加した学習者の *oh* の使い方の変化を調査し、

キーワード: 第二言語習得、談話標識、海外研修、相互行為、*oh*

*平成15年度生 比較社会文化学専攻

日本人英語学習者が談話標識を習得する過程の一端を明らかにしたい。

以下2節では *oh* に関する先行研究を概観し本論文で取り組む課題を明らかにする。3節で資料と分析方法を述べ、4節では分析結果を示す。5節はまとめと考察である。

2. 研究の背景

英語の母語話者の *oh* の使い方については、会話に出現する頻度や位置および機能が分析されている。Fuller (2003)によれば、アメリカ人は初対面の相手とのインタビューで *oh* を延べ1,000語あたり2.2回使うという。また、*oh* は (1) のように単独 (free-standing) で他の要素を伴わずに1ターン (turn) を構成することもあれば、(2) のようにターンの一部として現れることもある²。

(1) Heritage (1984, p. 314 会話例 (31))³

DJ: No. The Jam were the third group to go straight in at number one. Yeah?

→ C: *Oh*.

DJ: See people forget that the Beatles were first

(2) Heritage (1984, p. 308 会話例 (18))

V: And she's got the application forms. =

→ J: =*Ooh*: so when is 'er interview did she say

実際の母語話者同士の会話では (1) のように *oh* のみでターンが構成されることは比較的稀で、(2) のようにターンの冒頭に現れる方が多いと言われている (Fuller 2003)。Heritage (1984) や Schiffrin (1987) によれば何らかの新情報を受け取り (information receipt)、その情報によって知識や情報、志向、注意などの認知状態が変化した (change of state) ということを合図すると考えられている。このような機能をにやう *oh* はあいづちとして働くともみられる。また *oh* は自己修正 (self-repair) や他者の発話の引用などの文脈でも用いられることが指摘されている (Fox Tree & Schrock, 1999)。このような文脈では *oh* の後に実質的な発話が続くので、やはり *oh* が単独でターンを構成することはない。つまり母語話者同士の会話では *oh* は後続の発話を伴ってターンの冒頭に現れるのが典型的であり、また様々な文脈で使われるといえる。

日本語を母語とする英語学習者については、山本 (2006) で *oh* を他の談話標識よりも頻繁に使うことがわかっている。この調査は海外研修に出発予定の大学生を対象としていたが、その後、研修から帰国した同一学習者群を対象として再度調査を行った。本論文では海外研修の前と後の日本人大学生の発話資料を比較し、*oh* の使い方が海外研修後に英語母語話者に近づいたか否かを明らかにすることを研究課題とする。分析は英語母語話者の発話資料を用い母語話者が *oh* をどのように使っているのかを確かめることから進める。

3. 資料と分析方法

3.1 資料

3.1.1 英語母語話者資料

母語話者の発話資料は *The London-Lund Corpus of Spoken English* から採取した。36人のイギリス人 (以下 ES とする) による初対面同士あるいは家族や知人間の対面2者間会話を選び、そのテキストファイルの最初の200行を資料とした⁴。

3.1.2 学習者資料

本論文の調査対象者は、日本語を母語とする大学1-3年生の女性27人 (以下 JS とする) である⁵。JSは6週間にわたって英語圏の一般の家庭に滞在し大学付属英語教育機関において週25時間の授業などを受講した。

JSは海外研修に出発する6週間前と帰国してから6週間後に、英語を母語とする初対面の調査協力者とペアで対面自由会話を行った⁶。各ペアの会話時間は約20分間であった。会話の円滑な進行を促しつつ条件を統制するため、JSと調査協力者の双方に会話の開始時に自己紹介をするよう指示が与えられたが、話題や双方の役割につ

いての指定はなかった。本論文の学習者資料はこの会話18時間分をICレコーダで録音し全て文字化したものを用いた。以下では研修出発前と後に採取した資料をそれぞれJS_BEf、JS_AfTとする。

3.2 分析方法

人手とコーパス分析ツール (AntConc) および Microsoft® EXCEL の検索機能を利用し資料に含まれる *oh* の事例を検出し、その全てを分析の対象とした。まだ不明な点の多い日本人英語学習者の *oh* の使用実態やその変化を多面的にとらえるため、定量的分析と定性 (質) 的分析の両方を行った。具体的には、*oh* が現れる頻度と位置の傾向をノンパラメトリック検定を用いて明らかにし、*oh* がどのような文脈に現れどのような機能を果たしていたのかを相互行為 (interaction) の観点から分析した。次節では、ES 資料に基づき母語話者による *oh* の使い方を明らかにし、それを JS_BEf と JS_AfT 資料の分析結果と比較する。

4. 結果

4.1 ES

ES1 人ずつについて総発話語 (token) 数と *oh* を発話した回数から1,000語あたりの *oh* の頻度を算出したところ、*oh* は1,000語あたり1.38回 (中央値) 現れていたことがわかった。*oh* が現れる位置については、Heritage (1984) や Fuller (2003) の指摘通りターン冒頭で生起することが多く、*oh* のみで1ターンが構成されることは稀であることが確認された⁷ (出現位置の分布の詳細は4.2でJSとの比較の際に示す)。*oh* の前後の発話から会話参加者が行っていた相互行為を類型化したところ、*oh* は以下の文脈①から⑥に現れたことがわかった。最も多くみられた文脈から順に例示する。

① 会話相手による情報提供や評価の発話の直後

(3) ((共通の知人の消息について))

A: He's in Greece Yugoslavia and such places. at the moment.

→ B: *Oh* really.

② 会話相手による質問の直後

(4) ((知人の言動について))

A: And what did she say.

→ B: Uhm. *Oh* she wanted to know how we all were if we'd had a good Easter and ...

③ 引用した発話の冒頭

(5) ((知人の言動の内容について))

→ B: ((laugh)) She said, *oh* Mrs Tooley, your hair looks so nice ((laugh)).

④ 過去の出来事についての語り (story telling) の冒頭

(6) ((Bの一日の模様について))

→ B: ((laugh)) What else has happened. *Oh* I got my new cheque book today,

[which is which is (in)]

A: [Yes I noticed I thought it]

B: That's interesting because ...

⑤ 自己修正の直前

(7) ((コンピュータの操作方法について))

A: Here's B

→ B: No. It's not. It's, it's, e, *oh* was it. Sorry.

⑥ 自身の先行発話の強調

(8) ((AとBの共通の知人 Malcolm について))

A: ... I knew Malcolm when he was in knickerbockers [((laugh))]

B: [yes.]

→ A: *Oh* yes.

以上のESによる*oh*の使い方をふまえて、以下ではJSの*oh*の使い方がJS_BEFとJS_AFTでどのような変化を示したかを分析する。

4.2 JS

JS資料の分析結果を一言でまとめると、JSの*oh*の使い方は海外研修後にESに近づいていたことを示す結果が得られた。まず(9)で海外研修前のJSによる*oh*の典型的な使い方を示す。

(9) ((Georgeの友人について))

George: ... He's a surfer.

JS_BEF10: Surfer?

George: Yeah=

→ JS_BEF10: =*Oh*:: [cool.]

George: [Yeah s my friend so]=

→ JS_BEF10: =*Oh*

George: Yeah that's all he did for one year=

→ JS_BEF10: =*Oh oh*

George: was just surf=

→ JS_BEF10: =*Oh*:

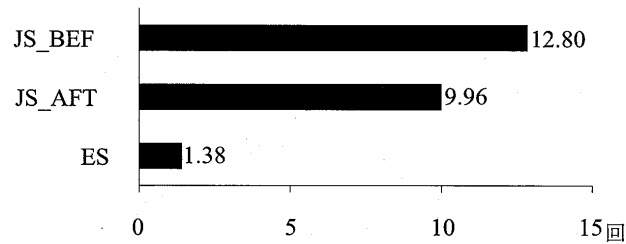
*oh*がかなり頻繁に用いられており、そのほとんどが単独で1ターンを構成し、Georgeによる情報提供の発話の間にあいづちとして差し挟まれている。この例のように、JS_BEFでは*oh*が(i)ESと比べて頻繁に現れる、(ii)単独でターンを構成することが多い、(iii)相手の情報提供や評価の発話にばかり現れるといった特徴が見出された。また、(iv)質問の直後にも頻繁に現れうまく答えられないときのフィラー(filler)として機能することもわかった。(iii)からはJSが使う*oh*のほとんどはあいづちとして機能しており、母語話者に比べて機能が限られていたといえる。また(iv)のフィラーとしての機能はES資料には全くみられず、JSが*oh*の機能を過度に一般化していたことがうかがえる。海外研修後はこうした特徴やJS特有の機能が修正されていたことが明らかになった。JS_AFTでは、(i)*oh*が現れる頻度が低下し、(ii)単独でターンを構成するよりも他の発話を従えてターン冒頭に現れることが増え、(iii)機能が多様化し、(iv)フィラーとして機能することが減っていた。以下で研修後の変化を詳しくみてゆく。

4.2.1 頻度

まずJS_BEF、JS_AFT、ES資料の総発話語数および*oh*を発話した人数、*oh*の延べ出現回数と1,000語あたりの出現頻度を表1に示す。その中から1,000語あたりの出現頻度のみを取り出して表したものが図1である。JSが*oh*を使う頻度はESと比べてかなり高いものの、JS_AFTではJS_BEFよりも頻度が下がっていることがわかる。ウィルコクソン符号付順位和検定の結果、JS_BEFとJS_AFTでは5%水準で有意な差がみられた($Z=2.01$, $p<.05$, 片側検定)。

表1 *oh*の出現状況

	JS_BEF (N=27)	JS_AFT (N=27)	ES (N=36)
総発話語数	20433	30326	28507
<i>oh</i> を発話した人数	25	26	28
<i>oh</i> の延べ出現回数	372	367	69
<i>oh</i> /1,000語(中央値)	12.80	9.96	1.38

図1 1,000語あたりの *oh* の出現頻度

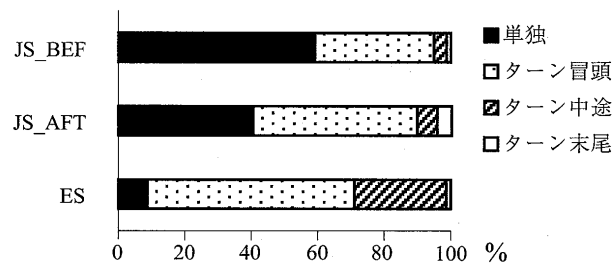
4.2.2 位置

oh が現れた回数を位置別に集計した結果を表2に示し、出現位置の比率を図2で表す。

表2 位置別にみた *oh* の出現回数

<i>oh</i> の出現位置	JS_BEF	JS_AFT	ES
単独	220 (59.1)	149 (40.1)	6 (8.7)
ターン冒頭	133 (35.8)	181 (49.2)	43 (62.3)
ターン中途	14 (3.8)	22 (6.0)	19 (27.5)
ターン末尾	5 (1.3)	16 (4.3)	1 (1.4)
合計	372 (100.0)	368 (100.0)	69 (99.9)

注、括弧 () 内は %

図2 *oh* の出現位置の比率

JSはESと比べて *oh* を単独で使う傾向が強いものの、しかしJS_AFTでは *oh* が単独でターンを構成することが減り、ターン冒頭に現れることが増えていたことが見てとれる。 χ^2 検定の結果、JS_BEFとJS_AFTでは *oh* が単独でターンを構成した事例数とターン冒頭に現れた事例数の偏りに有意な差がみられた ($\chi^2(1)=19.56, p < .0001$)。

4.2.3 機能

4.1でESが *oh* を使う文脈には6種類あることを示したが、この分類をJS資料にあてはめたところ次の結果が得られた。文脈の種類別にみた *oh* の出現回数を集計した結果を表3に示し、その中から文脈ごとの出現回数の比率を取り出して図3に示す。

表3 文脈別に見た *oh* が現れた回数

文脈	JS_BEF (N=27)	JS_AFT (N=27)	ES (N=36)
①会話相手による情報提供や評価の発話の直後	249 (66.9)	259 (70.6)	44 (63.8)
②会話相手による質問の直後	105 (28.2)	65 (17.7)	6 (8.7)
③引用した発話の冒頭	0 (0.0)	15 (4.1)	5 (7.2)

④過去の出来事についての語りの冒頭	1 (0.3)	5 (1.4)	5 (7.2)
⑤話者自身による修正 (self-repair) の直前	1 (0.3)	2 (0.5)	4 (5.8)
⑥自身の先行発話の強調	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.9)
不明	16 (4.3)	21 (5.7)	3 (4.3)
合計	372 (100.0)	367 (100.0)	69 (99.9)

注、括弧 () 内は %。同時発話や不明瞭な発話などの理由により文脈が判断できないものを「不明」とした。

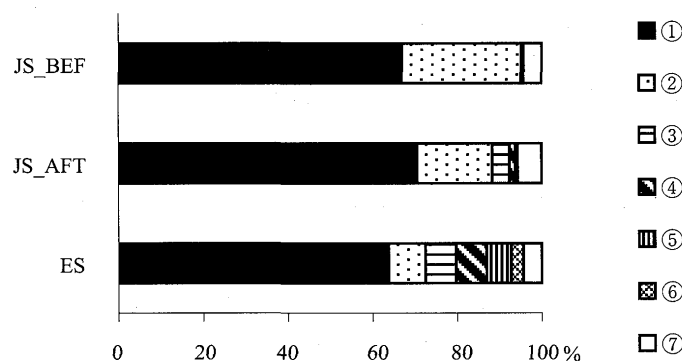


図3 *oh* が現れた文脈の比率

ES と JS では *oh* を使った回数に差があるため単純に比較することはできないが、海外研修後に *oh* を使う文脈のバリエーションが広がっており機能が多様化したといえる。例えば、JS_BEf では *oh* が③引用した発話の冒頭と④過去の出来事についての語りの冒頭に現れた事例は全くあるいはほとんどなかったが JS_AfT ではこうした文脈でも現れていた。一方で JS_AfT では②会話相手による質問の直後に *oh* が現れにくくなっていたこともわかった。以下 4.2.3.1 と 4.2.3.2 では海外研修後に *oh* の機能がより多様になったことと使われにくくなった文脈があったことについて、それぞれ事例に基づいて分析を加える。

4.2.3.1 海外研修後に使われるようになった機能

ES は直接話法による引用の一部として *oh* を発話することがあった (4.1 (5) 参照)。引用中に *oh* が現れる事例は JS_BEf 全くみられなかったが、JS_AfT では複数回観察された。

(10) ((JS08 の学習態度について))

JS_AfT08: So in a class?

Brian: Mm

→ JS_AfT08: Yeah, *oh* you are good student uhm my teacher said.

(10)で JS08 は英語の授業中に教員に褒められたエピソードを語っている。*oh* は教師の発言 “*oh* you are (a) good student” の一部として引用されている。Schourup (1983) によると、*oh* は母語話者同士の会話において引用として現れると、元の発話がなされた時の状況を会話の場面に再現させたり創作 (create) すると考えられている。海外研修後の JS は母語話者のように、*oh* に他者の発言をいきいきと提示し過去の出来事の語りに臨場感をもたらすという機能を持たせるようになったといえる。

次に、ES は過去の出来事について語るとき *oh* を使って話し始めることがあった (4.1 (6) 参照)。JS_BEf ではこのような *oh* の使い方は 1 例しかなかったが、JS_AfT では複数の事例がみられた。

(11) ((最近観た映画について))

JS_AfT13: ... I saw usu- usual movie.

Brian: Mm.

JS_AfT13: Cha Charlies m How can I, Charlie mm [chocolate factory]

Brian: [The chocolate] Charlie and the chocolate=

JS_AFT13:

=Chocolate mm yes

⋮
 Brian: Have you read the book?
 ⋮

Brian: ... It's a good book.

→ JS_AFT13: And I *oh* I saw Wedding Crushers as well.

Brian: Wedding Crushers I don't know can you tell me?

(11)ではJSが映画作品 *Charlie and the Chocolate Factory* を観たと述べたところ、Brianが原作小説を読んだかと尋ねた。その後原作小説についてのやりとりが12ターンにわたり続いた。JSは“And I”といったん産出しはじめた節を打ち切り *oh* と発話してから、改めて “I saw Wedding Crushers as well” と述べた。ここで原作小説についてのやりとりがしめくられ、別の映画作品についてのやりとりが開始されている。この *oh* は新たな話題 (topic) を会話に導入することを合図し、会話の大局レベルの構造の管理に貢献しているといえる⁸。

4.2.3.2 海外研修後に使われにくくなった機能

ESは②相手の質問の直後において *oh* を使うことは稀であり、使う場合には *oh* に続けてすぐ回答を与えるということが既にわかっている (4.1 (4)参照)。ESは質問に対する回答を長期記憶から想起した合図として *oh* を使っていたとみられる。一方で、JS_BEFでは *oh* の後に回答が続かない事例がしばしば見られた。

(12) ((スポーツについて))

Bob: ... do you play sports?

→ JS_BEF23: *Oh*

Bob: What sports.

JS_BEF23: Ah: ((laugh)) I don't play any sport.

(13) ((好きなテニス選手について))

Chuck: So she's your idol?

→ JS_BEF06: *Oh* ((laugh))

Chuck: Yeah. (1) Who do you uhm play tennis with.

(12)(13)でJSは相手の質問に対して *oh* と言うだけですぐに回答を与えていない。質問は上昇調で発話されており容易に質問と判断できるものであった。JSは相手の質問内容を理解できなかったが相手の発話の形式が完結したことを察してとりあえず *oh* で反応したか、あるいは質問の内容は理解したものの適切な回答が即時に思いつかず時間をかせぐためフィラーとして *oh* を使ったのではないかと推察できる。

oh がフィラーとして機能することは次の(14)からもうかがえる。

(14) ((趣味について))

Brian: Any other hobbies?

→ JS24_BEF: Other hobbies uhm (2) hmmm to:: (4) *oh* (1) I like *oh* hobby mmm I like playing u: with children.

JSの回答内で短い沈黙が複数回生じているが、*oh* は hmmm, mmm, u: と同じように沈黙を埋めている。

このように相手の質問に対して即座に回答ができないときに *oh* を用いることはES資料では全く見られなかった。海外研修後も一部のJSにこうした *oh* の使用がみられたものの、質問の後に *oh* が現れること自体が減りESのように回答を記憶から想起した合図として使われることが中心になった。

(15)は(13)と同じ学習者(JS06)の研修後の事例である。

(15) ((海外研修先で飲んだコーヒーの味について))

Bob: So uhm how was the coffee.

→ JS06_BEF: *Oh* coffee was very good.

(13)ではJSはBobの質問を即座に理解し *oh* の直後に回答を与えている。

5. まとめと考察

本論文では海外研修に参加した日本人英語学習者が使った *oh* の頻度と位置および機能を分析し、学習者の *oh* の使い方が海外研修後に母語話者により近づくように変化したことを明らかにした。海外研修に参加する前の学習者は、(i) 母語話者よりも頻繁に *oh* を使い、(ii) *oh* のみでターンを構成する傾向が強く、(iii) 主にあいづちとして使うが、(iv) 即座に返答できない際のフィラーとして使うこともある、という特徴を示した。海外研修後の学習者は (i) *oh* を使う頻度が減り、(ii) 単独でターンを構成するよりもターンの冒頭で用いようになり、(iii) より多様な機能を利用する一方で、(iv) 学習者に特有のフィラーとしての機能を使うことを控えるようになっていたとわかった。以下では海外研修が日本人英語学習者の *oh* の習得にどのように結びついているのかを考察する。

学習者の *oh* の使い方の背景には様々な要因が複雑に絡み合っていると考えられる。第一に *oh* は音韻的に短く単純で文に比べて産出がはるかに容易であり、学習者にとって少ない労力で会話に参加することを可能にする、便利な談話標識であるといえる。第二に *oh* は会話参加者を情報を提供する者と受け取る者という役割に分けると言われている (Heritage 1984, Schiffrin 1987)。母語話者との会話において学習者が自らを情報を受け取る側だと規定した場合には、その役割を果たすために *oh* を頻繁に使うこともあり得る。第三に母語であるからの転移が考えられる。学習者の母語である日本語の会話では英語の会話にくらべてあいづちの頻度が高いと指摘されている (メイナード, 1993)。また日本語の会話では「おお」という音韻的に *oh* に似た間投詞があいづちとして現れる。こうした母語からの転移や語彙の類似性が学習者の *oh* の使い方に影響を与える可能性がある。これらの要因によって、本論文で明らかにした *oh* の出現頻度の高さや機能の偏りはある程度までは説明できる。では、母語話者と異なる出現位置の分布傾向や母語話者に比べて限られている機能が、学習者独自の機能という結果は何に拠るものなのだろうか。これらの要因の他に学習者の *oh* の使い方を特徴付けるものとして、学習環境による影響があると考えられる。海外研修に参加した学習者は、それまで日本で生活し教室において外国語として英語を学んでいた。教室環境では英語で会話する機会が少なくそこで行われる相互行為の内容も限られている。母語話者の実際の *oh* の使用例に触れる機会やそのバリエーションが少ないため、*oh* の典型的な出現位置や相互行為において利用される様々な機能の習得が進みにくいと考えられる。こうした教室環境に比べると、海外研修は比較的自然な学習環境であり、学習者が母語話者と会話する機会をふんだんにもたらす。その結果として *oh* の習得が促されるのではないだろうか。今後は他の談話標識についても調査を進め、海外研修による談話標識の習得をより包括的にとらえ一般化の可能性を探ることを今後の課題としたい。

注

- 1 これまで談話標識の定義はいくつか提案されてきたが、本論文では談話分析の分野で一般的に用いられる定義に従った (詳細は Schourup 1999 参照)。
- 2 ターンとは、複数の人間が会話に参加し交替で話している際に 1 人の参加者が発言権を得て話し始めてから話し終えるまでのひとまとまりを指す。1 ターンは 1 語からなることもあれば、句や文、複数の文の連鎖からなることもある (Sacks et al (1974) 参照)。
- 3 Heritage (1984) による会話事例 (1) (2) は紙幅の都合上一部のみを示す。また表記方法を統一するため一部に変更を加えている。
- 4 *The London-Lund Corpus of Spoken English* は発話表記に独自の詳細な方法を用いているが、本論文では読みやすくするため JS 資料と共通の表記方法を用いて示す。
- 5 JS の TOEIC[®] テストスコアは最低 520、最高 855、平均 623.15 であった。
- 6 調査協力者は英語を母語とする 33～40 歳の男性 (アメリカ合衆国出身 2 人、カナダ出身 2 人、オーストラリア出身 1 人) であった。全員が教員であり日常的に日本語を母語とする英語学習者と接触機会を持っていた。
- 7 *oh* が mm や uh, uhm など実質的でない発話と共起した場合は *oh* が単独でターンを構成していたものとみなした。
- 8 会話は様々な大きさの構造が、それぞれ、より下位の構造を構成単位 (unit) として階層的に組み上げられることにより構成されることが考えられる (van Dijk, 1972, Sinclair & Coulthard, 1975 ほか)。発話を会話の最小単位と考えると、一貫性を持ち隣接しあう 2、3 発話によって発話よりも 1 つ上位の会話構造が作られる。このような会話構造は局所的 (local) な会話構造と呼ばれる。一貫性を持つ局所的な会話構造が幾つか集まることによってさらに上位の会話構造が作られる。このような会話構造は大局的 (global) な会話構造と

よばれる。局所的な会話構造の代表的なものとして隣接応答ペア (adjacency pair) があり、大局的な会話構造の代表的なものとしては話題 (topic) がある。

参考文献

- Aijmer, K. (1987). *Oh and ah in English conversation*. In W. Meijs (Ed.), *Corpus linguistics and beyond* (pp. 61-86). Amsterdam: Rodopi.
- Anthony, L. (2006). AntConc (3.1.303) [Computer software]. Available from Laurence Anthony's Homepage, http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/antconc_index.html
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Churchill, E. & DuFon, M. A. (2006). Evolving threads in study abroad research. In E. Churchill & M.A. DuFon. (Eds.), *Language learning in study abroad contexts* (pp. 1-30). Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Fox Tree, J. E., & Schrock, J. C. (1999). Discourse markers in spontaneous speech: On what a difference an *oh* makes. *Journal of Memory and Language*, 40, 280-295.
- Fuller, J. M. (2003). The influence of speaker roles on discourse marker use. *Journal of Pragmatics*, 35, 23-45.
- Hays, P. R. (1992). Discourse markers and L2 acquisition. *SLRF 1992 Proceedings*, 24-34.
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: studies in conversation analysis* (pp. 299-345). Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (1998). *Oh*-prefaced response to inquiry. *Language in Society*, 27, 291-334.
- 石崎雅人・伝康晴 (2001)『談話と対話』東京大学出版会
- 近藤佐智子 (1997). The Development of pragmatic competence by Japanese learners of English in a natural learning context-longitudinal study on interlanguage apologies [日本人英語学習者が自然な学習環境で学ぶ際の語用論的能力の発達—謝罪に焦点をあてた縦断的研究—]. Available from Sachiko Kondo's Homepage, <http://users.jrc.sophia.ac.jp/~k-sachik/research.html>
- メイナード, 泉子・K (1993)『会話分析』くろしお出版
- Müller, S. (2005). *Discourse markers in native and non-native English discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sacks, H., Schegloff, E. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking. *Language*, 50, 696-735.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, L. C. (1983). Common discourse particles in English conversation. *Working Papers in Linguistics*, 28. Ohio: The Ohio State University.
- Schourup, L. C. (1999). Discourse markers: Tutorial overview. *Lingua*, 107, 227-265.
- Sinclair, J. McH. & Coulthard, R. M. (1975). *Towards an analysis of discourse: The English used by teachers and pupils*. Oxford University Press.
- van Dijk, T. A. (1972). *Some aspects of text grammars: A study in theoretical linguistics and poetics*. Mouton.
- 山本綾 (2006)「日本人大学生の英語会話における談話標識の使用」『社会言語科学会第17回大会発表論文集』122-125

Appendix 発話の表記方法

- () 会話内容の概略および笑いなどの周辺的な言語・非言語的情報
- . 下降調 [] 同時発話の開始と終了位置
- ? 上昇調 = ターン間の切れ目のないつながり
- , ごく短い沈黙 (数字) 沈黙の秒数
- 語中の中断 () 不明瞭な部分
- _ 強く発話された部分 ... ターン中の一部の省略
- : 直前の音の引き伸ばし † 複数のターンにわたる省略

(2007年1月12日受理)